

令和元年度第1回秋田県立博物館協議会議（要旨）

I 日 時 令和元年7月31日（水）13：30～15：30

II 場 所 秋田県立博物館 大会議室

III 出席者（20名）

委 員 大友委員、加藤委員、後藤委員、佐藤（和）委員、佐藤（は）委員、
佐藤（美）委員、菅原（香）委員、菅原（潤）委員、豊田委員、
星崎委員、松橋委員、森下委員

生涯学習課 小野寺学芸主事

事務局 高橋館長、柿崎副館長、梅津展示・資料班長、藤原普及・広報班長、
池端学習振興班長、桑原総務班長、佐藤主事

IV 議事概要

1 開会

2 館長あいさつ

3 会長あいさつ

4 案件

(1) 報告

ア 令和元年度博物館事業計画について

イ 特別展「1964－世界の祭典から半世紀－」について

(2) 協議

2015～2019中期ビジョンの評価と、令和2年度から5カ年の中期ビ
ジョンの策定について

(3) その他について

5 閉会

<報告案件【令和元年度博物館事業計画について】に関する質疑応答>

- (委員) 明日開催の「教員のための博物館の日」への参加予定25人の内訳はどうなっているか。またこの人数は例年並みか。
- (事務局) 申込者数は例年よりも多い。昨年度は17人だった。内訳としては、小学校教員が半分以上となっているが、特別支援学校教員も数名申し込んでいる。なお、総合教育センターの研修員向け年間計画に組み込まれている関係で、25名のうち11名が総合教育センターの研修員となっている。
- (委員) 現在開催されている特別展は、これまでの展示の内容と異なり近代的で大変面白い企画だと思う。観覧者数の状況はどうか。
- (事務局) 8,000人程度を目標に計画を立てたが、7月現在ではその目標値をかなり下回っている。メディアなどにPRしていただいているが、委員の皆様にもPRしていただければありがたい。
- (委員) 今後広報を強化する予定はあるか。
- (事務局) この後、新聞広告を3回出す予定にしている。またテレビ局にも報道以外の番組で取り上げていただけるよう依頼している。
- (委員) チラシ等どのように配布しているのか。児童生徒への配布状況はどのようになっているか。子供が自宅にチラシを持ち帰り、展示を見に行きたいとせがめば、親や祖父母は連れて行かざるを得なくなると思う。それが集客に繋がるのではないか。
- (委員) 湯沢市に住んでいるが、県立博物館に子供を連れてきたことがない。学校から美術館のチラシを持ち帰ることは頻繁にあるが、博物館のチラシはない。秋田市から遠いこともあるかもしれないが、もっと博物館の存在を広めていければいい。
- (委員) 仕掛けとして、チラシに観覧無料券を付けてみてはどうか。子供の観覧料単価を少し上げ、その同伴の保護者1人分を無料にすれば、来館者数が増えるかもしれない。
- (委員) 以前、小中学校に勤務していたが、このようなチラシが届いた場合、学級分に仕分けて配ったり、生徒昇降口において自由に持って行かせたりしていた。大量のチラシの中で子供の目が行くような何か光る工夫があるといいのではないか。
- (委員) お金を掛けてポスターを作るよりも県の広報誌などに大きく載せてもらった方が宣伝になるのではないか。
- (事務局) 付加価値の付け方や観覧料の設定の仕方について、今後色々検討していきたい。

(委員) 企画展と特別展の違いは。

(事務局) 全国の博物館で必ずしも同じではない。当館では特別展は有料展であり、企画展は基本的に無料展であるが、他の施設では企画展でも有料のところはある。当館における特別展は、例外もあるが、他の企画展と比較すると予算規模が大きく、秋田に限らず、全国的な資料を紹介するという位置づけにしている。

<報告案件【特別展「1964－世界の祭典から半世紀－】に関する質疑応答>

(委員) 「オリンピック」という文言をタイトルに使えないということだったが、「五輪」も使えないのか。「1964」といっても、今でこそオリンピックだと分かるが、普通は見てもすぐには分からない。

(事務局) 「五輪」は商標登録されており、使用にはリスクを伴うことが予想される。当初は、「東京オリンピックの時代」というタイトルを考えたが、それもNGだとのことでこのタイトルになった。なお、共催となってる独立行政法人日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館は、現在建設中の東京国立競技場の中にある博物館で、現在休館中となっているので今回特別に資料をお借りすることができた。国立競技場が完成すれば、しばらくは借りられないだろう。

(委員) それら資料の運搬費用や保険料などの経費が特別展を有料にする理由ということか。

(事務局) そのとおりである。

(委員) この企画についてちょっと残念なことがある。私の専門の研究分野だと、1964年、昭和39年という年は色々なことがあった年で、林業基本法という林業をこれからどうやって育成していくかという法律ができた年であり、木材の自由化がされた年である。実は前の東京オリンピックの年に国内関係はその波に晒された。それぞれの産業や経済でその頃起きたことが、四十何年経ち現在までにどのようなようになってきたかを振り返る企画があったらよかった。そのように考えると、経済などに関わる事柄を博物館で取り上げる頻度は少ない気がする。

(委員) 今回の特別展の準備に苦労されたようだが、この展示内容に決めたのはいつ頃か。

(事務局) 最初に外部に対してアクションを起こしたのは去年の夏休み以降であるが、去年の夏ごろには一応この展示で行こうと決めて準備を進めた。通常特別展の準備は1年前、早いものは2年ぐらい前から準備するものもある。

今回最初に資料に当たったのが前年の8月なので、準備としては遅い方である。

<協議案件に関する質疑応答>

(委員) 中期ビジョン等で指標になるのは特別展の参加人数や入館者数などだろうが、その他にアンケートなどは随時取っているものか。

(事務局) アンケートは、これまでも記入コーナーを設置し、お客様からの声ということで頂戴している。件数は年間を通して100件くらいだが、今年度から件数を増やすために現在開催中の特別展で用紙を配布したり、記入・回収場所を増やしたりしている。

(委員) 私が所属する団体は児童会館を指定管理させてもらっているが、夏と冬の期間、1か月間ずつ集中的に来館者からの質問票を集計している。特別展などイベントを開催しているときにどンドン来館者に声を掛けると普段書かない方がどのように感じているのかなどキャッチできるのではないか。

(委員) 出張展示というのは、博物館の方で場所を決めて行っているのか、それとも各館や類似施設から希望を受けて行っているのか。

(事務局) 毎年11月～12月頃、博物館側から県内の各市町村の類似施設、教育委員会などに展示メニューを提示して希望を募っている。2月末あたりを目処に締め切り、申し込み施設と相談をした上で、翌年の出張展示を決めている。それ以外に随時依頼が飛び込んで来ることもあるが、可能な範囲で実施している。

(委員) 展示する地域に合わせた展示をやっているのか。

(事務局) こちらで用意したメニューから選んでもらう形である。例えば、博物館で実施した展示の縮小版をパッケージ化するなど、こちらで用意できるセットから選んでもらう形にしている。ただ、会場に合わせてさらに縮めたりとか広げたりとかする必要があるので、相談しながら、手直しして実施している。

(委員) 資料が展示できるような施設でなければ行わないなどの決まりはあるか。

(事務局) 展示する資料による。直射日光に当たると1か月保たないようなものは対応していない施設には出せないし、温湿度管理ができない施設には出せない資料もあるので、その会場の条件と相談して、出すものが決まってくる。例えば、本来は展示室ではない場所では、鉱物標本や温湿度の影響を受けづらい貝殻などは展示できるが、彩色された図絵のようなものは出せ

ないので、事情に合わせて可能なものを展示させてもらっている。

(委員) 資料3 ページ二つ目の「常識への挑戦」において、「常設展示においても、「常設展示は変わらない」という、常識に私は挑戦します」という件と、「県民型の展示企画を推進します」という件があるが、これは具体的にどのようなことをしたのか。

(事務局) 常設展示については、部分的に付け加えるとか、入れ替えるという試みを行ったが、結果的には大きな変化には至らなかった。例えば、自然展示室においては魚が自分でセリフを喋っているような形の説明を付け加えたり、人文展示室では近世の農村関係の展示で、ある地域の昔の肝いりの日記を基にして、小さいパネルを月ごとに入れ替えて一年間を紹介するような試みを行った。小さい規模だったが、頻繁に来館される方の中には変更された部分を見つけて喜んでくれる方もいたようだ。

(事務局) 県民参加型については、昨年春に行った、今秋田が抱えている様々な課題を9つのコーナーに分けて展示する企画展「あきたびじょんセレクション」において、付箋紙とパネルを用意し、来館者が自由に記入して貼り付けるコーナーを設けたり、地元で活動している人たちを紹介するコーナーでは、飛び入りパフォーマンス的に予告なしで演奏や踊りをやっている団体の方が来て披露するという試みを行った。全体的な設定自体が分かりづらかったためか、大きな話題になるというところまでには至らなかったが、県民参加型の試みとしての例にはなったと考えている。

(委員) 博物館の展示は、基本的には現在と過去という視点に基づく展示が多いと思うが、今変わりつつあるものをきちんと記録するというところを取り入れることはできないか。特に生物などは気候変動で分布が変わってきているものが非常に多い。それらの把握を博物館だけでやるにはおそらく手が足りないだろう。県民の方から目撃記録や標本などの情報を集めて随時更新できるようなものがあってもいいのではないか。

(事務局) 以前に試みた事例はある。「秋田の昆虫」という展示の中で、温暖化に伴う昆虫の北上に焦点を当て、実物を展示したうえで、目撃情報を展示の中で募ったが、寄せられた情報は残念ながら1件のみだった。

(委員) その展示を現在の常設展示の中に取り入れられないか。「第一発見者になりませんか」などとずっと貼っておくだけでもいいのではないか。今起きつつある変化を捉えるための手法としては市民の参加があるといいと思う。

(事務局) 常にやっていないとおそらく反応がないと思う。どんどん情報が集まれば非常にいい。

(委員) 高校生を招いて学生会議を開き、そこで出た意見を企画展などに反映するなどの手法はどうか。消費文化は田舎よりも都会だと思うが、想像文化は都会よりも田舎だと思う。社会というのはどんな仕組みになっているのか、昔はどうだったのかというところは、現実味がないと想像できない。歴史が好きな子は興味があるから得意になるが、そうではない子にとっては昔は昔のまま、でもそれを今勉強しなければならない。想像がつかないから覚えられない。例えば博物館での勾玉作り体験のように、ただ作るだけではなく、その時代背景などを面白楽しく教えてもらえば子供たちも興味を持つ。そのように時代背景を考え想像力を持って手作業をすることで、博物館が子供たちの学びの手助けをしていただけるのもありがたい。

(委員) Facebook 経由で何かをやると何かがあるという仕掛けをつくってはどうか。どのようなニーズがあるかを Facebook で選択式にしてみたりとか、ドリンク一杯サービスするとかでもいいのではないかな。もっとユーザーが使えるように取っかかりをつくっていくというのは、今の時代もっと行ってもいいと思う。

(委員) フォロワーが1,300人くらいだと少ない気がする。このうち例えば1%とか2%の方が博物館に来館してくれるとすれば、何か Facebook でいいねを押してもらえそうなPRの仕方を考えるべきではないか。何か別の形でいいねを押してもらおうとその友達に伝わりその方たちも見てくれることになると思う。そういった広げ方もあるのではないかな。

(委員) 資料3ページ四つ目の「秋田から日本へ、そして世界へ」についてだが、外国人の方が子供連れで来館されることはあるか。また、国際教養大学など外国人の学生向けに秋田を紹介する機会を設ければ、彼らが母国に帰ったときに秋田はこんな所だよって紹介してくれるのではないかな。そうすれば、日本旅行の際に秋田に行ったら博物館に行ってみようという気になるのではないかな。

(事務局) 受付に配置している解説員が外国人の来館を記録しているが、アジア系だと見ただけでは分からない場合もあるし、日本語を流暢に話しているが実は外国人だったということもあるので正確な数字とはいえない。家族連れに限ると年間10組程度だと思う。全来館者のうち外国人の方は100人には達していない印象である。外国人への対応としては、総合案内入口に英語、中文、ハングルで簡単な館内案内を用意している。ただ、残念ながらその言語で話し掛けられても聴き取って対応できる職員はほとんどいない。幾らか英語が話せる解説員が配置されている場合は対応しており、現在ハングルを勉強している解説員もいる。また、ホームページについて

は英語版のページも公開しているが、大変簡略なもので外国語圏の方への対応という点では不十分だと考えており、今後取り組みが必要だと捉えている。

(事務局) 首都圏とか関西圏、それに北九州や福岡などの場合、少なくとも館内案内は英語版や韓国版が用意されており、大型施設では展示の資料説明なども2カ国語3カ国語対応が当たり前になりつつある。来館者に占める割合が凄く多くなっているため、否応なく必要に迫られてのことと思うが、当館ではそこまで必要に迫られている感じは薄い。

(事務局) 外国の方たちが秋田県立博物館に来て何を求めているのか、その方たちに最低限伝えなければいけないのはどういう情報であるのかを、ある程度精査した上で対応を検討していくことが今後必要になってくるかと思う。

(委員) 冒頭の館長あいさつの中で、2025年に開館から50年を迎えるに辺りハード面をどうするかという問題も出てくるだろうとの話があったが、その辺りは具体的に進んでいるのか。

(事務局) 平成16年に先覚記念室と菅江真澄資料センターを除く常設展示を一新した。その際には、平成9年にニューミュージアムプラン21検討委員会が設置され、長期的な全体計画を立ててリニューアルに向けた準備を進めた経緯があるが、今現在はまだそのような形で進んでいるものではない。前回リニューアルと同様の形で進めていくためには、今後の博物館をどうしたいのかという内部の考え方をある程度まとめなければならない。今はその辺りを内部で検討し始めている最中だにご理解いただきたい。

(委員) 平成16年以降は比較的10万近い来館者数で推移している。リニューアル前までは年々減少していたのに対して、リニューアル後はコンスタントにお客さんが来ているようだが何か違いがあるのか。

(事務局) 様々な要因があると思うが、一つはリニューアルにより参加体験型の展示室を設けたことだと思う。また現行中期ビジョンに掲げている、打って出るといふ館外で行う展示を増やしたことも要因の一つだと捉えている。

(事務局) 去年一番入館者が多かった日は、金足農業高校の写真展を行った8月27日、28日だった。2日間で7,500人が入館した。急な話だったため、広報らしいものは行えず、ほとんどがFacebookによる拡散だった。先ほどの話題にも挙げたFacebookをうまく活用していくことの必要性を感じている。またその際、お客さんの側で求めるものを提供すれば、正直に来館者数に現れるものだと実感した。

(委員) 昨年度末で来館者数が延べ380万人に達している。今年度中に390

万人、来年度には400万人に達するのではないか。400万人目の来館者には記念品などを贈呈する予定はあるか。

(事務局) 200万人、300万人を迎えた際は記念品の贈呈を行ったので、今後とも節目となる場面では記念品贈呈などを行うことになると思う。

(委員) 入館者数がきちんと記録されているが、入館無料のこの博物館ではどのような方法で実数をカウントしているのか。

(事務局) 2階正面入口の総合案内と1階入口に解説員が常駐しており、そこでカウンターを使って実際の来館者を数えている。実際に人の目を通して数えているので、センサーなどの機械を使っている県内の他の教育機関に比べて遙かに正確な数字となっている。

(委員) 例えば子供やお年寄りなど、年代に合わせた展示や企画を考えたりしているのか。

(事務局) 毎回というわけにはではないが、親子で楽しんでもらえる展示は当然意識する。あまり偏りのないように、年間行う4本の展示の中で子供向けとか、どちらかというとな人を対象にしたものとか、年間計画を立てていく中で検討しながらやっている。しかし、それが十分であるかは外部の方々からの評価になると思う。

(委員) 資料3ページ三つ目の「学力日本一の力を秋田のために」というキャッチフレーズは次期中期ビジョンにも盛り込むのか。現行中期ビジョンでは、その具体的な中身は「未来の学芸員養成」というテーマに集約されるので、これ自体を変える必要はないと思うが。

(事務局) 当然様々な理由で秋田を離れる方がいると思うが、秋田のことをよく知って離れた方と、秋田のことを丸っきり知らないで離れた方とでは、秋田に対する思い入れはやはり違うと思う。自分の気持ちの中に「郷土である秋田」というものが少しでも内在してもらえるよう、小学生や中学生あるいは高校生を対象とするセカンドスクールの利用や学校での出前授業、2014年から新しく始めた未来の学芸員養成講座などで来館された際は、秋田にはこんないい場所がある、こんな素晴らしい文化や自然があるということをできるだけ伝えるように努めている。秋田の素晴らしさを若い世代の方に伝えていくことも使命の一つとして意識しながら接しているつもりである。

(委員) 今の話は本当に賛成できる。それでは三つ目の「学力日本一の力を秋田のために」というフレーズと四つ目の「秋田から日本へ、そして世界へ」というフレーズを、少し整備してもいいのではないか。「未来の学芸員養成講座」はこれでもうでき上がったフレーズだが、今館長が仰ったことを

誤解を恐れず適当なキャッチコピーを付けると、「県民みんなが秋田〇〇大使」のようなイメージを目指そうという趣旨になるのではないか。私は滋賀県出身だが、滋賀県では何かと琵琶湖に絡めた教育を行っていて、それにより郷土愛を育ませてきた。秋田を出る人もたくさんいる中で、先ほど館長が仰ったように、秋田のことをよく知ってもらおうということをここで訴えてもいいたらと思うし、それが結果的にこの秋田の人口減少を食い止められるような何かに繋がるような流れを打ち出せれば、凄くいいものになるのではないか。

(委員) 私は今アイリスの会という博物館のボランティアの会に入っているが、その中で藍チームというチームを去年立ち上げた。このチームは、博物館が掘り起こしてきた秋田の文化である秋田の絞り染め、藍染め技術の継承活動を支援すること目的にしており、これまで横手高校を始めとして4つの高校の生徒に私たちが学んだ技を伝える機会を得たが、横手高校の生徒は、その後絞り染めの歴史を自分たちで調査したり、下級生に教える活動をしている。私たちの目的が高校生によって実現できるのかなと感じた。今後も秋田の伝統を繋げていきたいと思っている。

(委員) 今のご意見を次のビジョンに盛り込んでいただきたい。おそらく一番最後の中になると思うが、伝統を維持すべく頑張ります的なニュアンスの文言がほしい。

(委員) 秋田の魅力を発信するということに含めていただければいいのではないか。

(事務局) 伝統的なものを継続していく、消えようとしているものの火を消さないでいくということ、そしてそれを次世代に伝えていくということは、どこかで誰かがやらなければいけないことだと思う。それが秋田を代表する文化や自然であればなおさらだ。博物館にノウハウがあって蓄積してきた分野に関しては、今後も努めてやっていきたいと思うし、その辺りも次期中期ビジョンの中にどのように盛り込んでいけるかを検討していきたい。